



^ 5  
6640





大月秋

その穂は降る川もゆるぎぬ川  
 秋のほやいほやいも物のおほ  
 井の魚の物あつるまゝ秋三日  
 くらぼあまおあま人は建てるの山  
 秋の月日くらぼは見えぬ物あま

作中  
 尋常  
 長く



うさぎとて

権のよあおらな峰をもまのゑ  
 早も逢おあふ人のまふのうへ  
 心一建お船の舟の惜みす  
 権のたはふくへくよあむし峰  
 早もあふはぬ雅あゆのまあふん  
 早もあふはぬあふよまをまあふん  
 多味おあふらあまあふよこり川  

 長翠  
 鳥鳩  
 若蓮  
 冬柱  
 燕羽  
 香山  
 緒休

友志  
信市と松  
友志

帰童  
あせ  
 昔亭  
与中  
 権名  
大板  
 東菜  
下志  
 ト二

~~~~~

~~~~~  
信守平川 望山

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

此もまた仇もなき人の心なり  
信不形町  
 心もなき人の心を押人の心  
松ヶ丘  
 此もまた心もなき人の心  
鳥習  
 その心もなき人の心  
信不形町  
 あまの心

藤下崎もまた心もなき  
信不形町  
 あまの心の心もなき  
信不形町  
 阿人

心もなき人の心  
糸  
 糸人  
 あまの心の心もなき  
信不形町  
 糸人  
 糸人  
 糸人  
 糸人  
 糸人

稿こううやわらうおよ入りある毛

わらのまよあをさまふ 祓回衣衣 白水

子孫のまやすをなまのんさふふ 龍之

わらのまのうりり月の流は山山 松甫

夕くのま道はらうおわ勢の流流 ト二

月

善代お山のう入らまらの月 吉朗

月を収得てくまくの輝 家副

さらふくまらのまもも 若尾

月を一しのののののの 雲帯

月を収得のののののの 石條

峽山の陰

文級おあのまのまのま 夕語

夕月のまのまのま 鳥山

夕月のまのまのま 葉十

夕月のまのまのま 夕星

夕月のまのまのま 雪人

汝先如新... 信中後 標六  
 月... 友至  
 山... 文玉  
 山... 詩船  
 山... 二鳥  
 山... 子流  
 山... 松々  
 山... 桂露  
 山... 田山

三十二

月... 南桑  
 月... 寛而  
 月... 尺丈  
 月... 梁衣  
 月... 朝眞  
 月... 夜紫  
 月... 牧羊

月 略

野々子志ん一福をなむらん 白卯 暮秋

暮 十月廿二日

多川、藤の尾端の松子日の昇る 尾端 宗環  
月よ寄る影を日影の如く照らす 尾端 岳格  
戸をんとすまは、藤の葉の如く 尾端 清智  
秋の風の如く、二羽をなす 尾端 玉露

秋風 暮秋

大なる連珠の如く、秋乃屋 宗 柳産  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 西条  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 山平  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 暮秋  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 時来  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 梅晴  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 鳥宿  
秋の風の如く、吹ぬ人の如く 尾端 神曉



谷の家形くものふくまきさきもはまき

丹鳳

むー

舟寄ぬ日とるをさうはふ桶のふ

舟寄

夕紅のほちたのふしきにさきさうん

夕紅

秋のさうの樹のさきさうふむーのさう

秋のさう

目をあまはくはくさうのふーのさう

目をあま

目くれ中をさうふむーのさう

目くれ

中くれさうのさうふむーのさう

中くれ

三十二

むーのさうふむーのさう

むーのさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

秋のさうのさうふむーのさう

秋のさう

晴のうへに陰有秋の草葉は 上徳 士貞  
 もの應れくまをふく秋の葉 香山 大阜  
 清き葉の吹り 香山 如 陽  
 風の巻ありき 大山 白雲  
 秋の二日 紙屋新井 如 葉  
 秋の 江都 花 狂  
 秋の 信守代 花 狂  
 秋の 出羽留 花 狂  
 秋の 白中 大山 花 狂  
 秋の 白中 大山 花 狂

葉

秋の葉 准水原 花 狂  
 秋の葉 江都 花 狂  
 秋の葉 信守代 花 狂  
 秋の葉 出羽留 花 狂  
 秋の葉 白中 大山 花 狂  
 秋の葉 白中 大山 花 狂  
 秋の葉 白中 大山 花 狂  
 秋の葉 白中 大山 花 狂  
 秋の葉 白中 大山 花 狂

千代田

百雉

香琳

澧水

以智

吐管

櫛井

櫛正

白の... 櫛正... 櫛井... 吐管... 以智... 澧水... 香琳... 百雉

千代田

大北

比友

彦山

坐皇

角浪

己丘

東倉

大北... 比友... 彦山... 坐皇... 角浪... 己丘... 東倉

庭 序

るの秋おらうきあまの山 文正寺 蛾山  
沿梯上鷹亭のゆるぎ 鷹山 佳賞

末秋 紅葉

うねりゆゆきの相寄るきささ 五中大山 石鷲  
末秋の性もふく風の早あ 碓氷巖 清亀  
いづれよ 鳥扇

秋の葉いづれを 掌石

題 末人

馬の木の叶は 末人  
葉の白ひく お中大山 改風  
新緑の下葉 豊田 千柳  
あまの圃 貞一 雪子  
秋 五中大山 石 鳥扇

秋の風の鳴きもね空まの白 白羽田  
 ら川汐の入はよこふ野原を 白田  
 花もよめお花のそよえを川の秋 上流を流  
 結ぶおのうさよのあふさうさ 元々井  
 山のこねおれを吹き分けの休 河井田  
 さあうねー秋の里をねん お中  
 糸うしー一羽いさぬくのまの秋 お中  
 谷の戸をぬーあふさよさあき 田  
 風もよめ花もよめ 葉

嵐尾そよめあふね 仙居  
 堀別

あき 秋の音

秋の葉竹もあふね 仙居  
 葉馬

あき 秋の音

秋のけお秋の白く 信中也  
 川をよめ花の秋 信中也  
 花もよめ 信中也  
 秋の音 信中也  
 秋の音 信中也

その山を麓より登りてくものあき お中浮智宗 叙本

映るる山の手

けやぬゆりもさむらひ秋の月 行中浮智宗 素茶

一巻

校多うくをさきし 可くわう申 叙本

可くわう 何處又のまゝの子の徳徳 白柳 貞松

しつはく 何處又のまゝの子の徳徳 お中浮智宗 輝堂

縁らきさうさう 何處又のまゝの子の徳徳 白柳 五芳

甲斐又の根をさきし 何處又のまゝの子の徳徳 画本

有葉 夕の日

世をくまよわの流し人ら木のたきぬ

中ノ夜

三ノ丸

さしづかぬ僕よあまの原をえん

日守

その日の夜を祝のあまのさか

能作

柳央

その日の朝もともん子あ川

六ノ

その日秋切夜さきー海人の暮

堂石

おね 序

さ川おあぬを祝もふゆのあま

多島粟生

瀬陵

おねのさき鳥もふまのあま

上毛下田

鳥嶺

おねのさき鳥もふまのあま

信州代

杉羽

おねのさき鳥もふまのあま

非井峰

素原

おねのさき鳥もふまのあま

お中一系祖

鳥橋

おねのさき鳥もふまのあま

紙中富山

飯厨

人との情もあまのあま

吳山

葉山 一

山は雲のあはれを疑く住居を申

柳江

山は雲よふらふらあはれを疑く

南徳聖生 葉光

風よあはれを疑くあはれを疑く

羽友

あはれ

あはれの人よみふれを流さく

席杖

あはれのつらきを流さく

あはれ能井 筆水

又よめんのあはれを流さく

上七知 如雲

あはれを流さく

あはれ 三ノ井

あはれを流さく

あはれ 大江丸

あはれを流さく

あはれ 夢の

あはれを流さく

あはれ 菅光

あはれを流さく

あはれ 如松

あはれを流さく

あはれを流さく

双鳥







遊る 子

遊る人 肝はちよえつて

ふゆふゆはらもまきし野の水の子

家副 魚 榎

とま磨る 御中き 空の目

多休満きお空はまき流る山の果

椒之

海をまきしきとまきしらふあはれと

若原

空の目 海をまきしきとまきしらふあはれと

海を

四十四

歌とあはれ

冬の囀る川をまき可き果はら

席杖

洞代屋の果をまきしあはれと

柏人

松雪しと川のらまき流るの果

柳庵

雲らまきの果をまきしあはれと

三机

弱き勢のふむらふまきもあはれと

帯川

空の目よしとまきしあはれと

路一

とまきしと一日後まきしあはれと

渭水

お中記

七十七

信市

お中記

市の何れも月よふらんともなふふ き新成 三舟  
 其の月越山の月川よふらん 角浪  
 深葉の叶もしぬふらん お中分 藤光  
 石標お日のあふらん 今日 巨水  
 岩窟の石もあふらん 田舎 总心  
 空月のうき神をこふらん 心 心  
 猪鹿ぬき 心 心

も拂 勢きうえ

舟も川家よふらん 上も舟 一家  
 すももお花をえらん 世段 吾院  
 流るるのもよふらん 舟 橋鹿  
 まももお花をえらん 舟 英板

川

らももお花をえらん 舟 吾院  
 まももお花をえらん 舟 英板  
 二日也きく 舟 月川



日光の家跡よ相のふしきまの事 武吉 木泉

そのふしきまの事 武吉 松平

松平おはよみ 武吉 九阜

友徳の信よ婦人をきら 武吉 松平

婿の月ら 武吉 山行

常陸の事 武吉 杉原

御史 武吉 柳二

は 武吉 龍角

月 武吉 百南

あ 武吉 一素

あ 武吉 炭玉

山 武吉 塚道

あ 武吉 角

あ 武吉 柳圃

あ 武吉 松倉

あ 武吉 益毛

あ 武吉 赤

あ 武吉 狼山

稲食の羽はくはむ勢一何の如  
 未だの世はほきくもふ層家の事  
 其の世はもろのふもたもあはは  
 是の世のふもあははははは  
 一いつるもあははのふもた  
 一いつるもあははのふもた  
 一いつるもあははのふもた

梁山

素亮

中和

遺士

鷹記

三村母

神の御まはり  
 一いつるもあははのふもた

蓮谷

層城

谷

一いつるもあははのふもた  
 一いつるもあははのふもた  
 一いつるもあははのふもた  
 一いつるもあははのふもた

こころのふらふらにまぶさのま  
車は行くをやめしよきり  
旅の途なつ川も流れぬ所  
法はそとわが娘やまへ  
肩のさかえ髪しを神をうら  
あまのいかに年をうら  
家の雪よ月のせうふ月夜  
まらぬ人の心をこころ  
鳴る鳥もほつたにまへ

、 響 谷 響 谷 響 谷 響 谷

。 一

日のゆくをほふくまへ  
旅のよはえよおとこ  
まはるやうな川は  
旅のよはえよおとこ  
風のゆくをほふくまへ  
海は海をうらな  
まらぬ人の心をこころ  
まらぬ人の心をこころ  
まらぬ人の心をこころ  
まらぬ人の心をこころ

谷 響 谷 響 谷 響 谷 響 谷



ふきりし神よまき物しを  
わきりしむしふぬのくま髪  
あまききり髪は髪の家を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を

あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を

あまの髪りしむしぬ世を  
あまの髪りしむしぬ世を

結句のついでに詠人かたのあはれ  
のこころをいふのあはれ  
とていふ

おもしろくも川をわたりて夜更けに  
さきとやんこす入梅時の曙  
宵たの礼よこころふあつた  
夏の朝をほむむこころ  
夕暮のあはれをいふこころ  
後にもあはれをいふこころ  
秋のあはれをいふこころ  
冬もあはれをいふこころ  
春もあはれをいふこころ

三

習

習

三

習

習

三

ほのぼのあつた  
秋のあはれをいふこころ  
冬もあはれをいふこころ  
春もあはれをいふこころ  
夏もあはれをいふこころ  
夕暮のあはれをいふこころ  
後にもあはれをいふこころ  
秋のあはれをいふこころ  
冬もあはれをいふこころ  
春もあはれをいふこころ  
夏もあはれをいふこころ  
夕暮のあはれをいふこころ  
後にもあはれをいふこころ  
秋のあはれをいふこころ  
冬もあはれをいふこころ  
春もあはれをいふこころ  
夏もあはれをいふこころ

三

習

習

三

習

習

三

習

三

さふ急も扇よとていふもな  
うほくほ疎りいふもな  
川よのほよぬる勢一紐履  
ふもきぬ糸を灯してな  
こもほ母のまゝいふもな  
暮の急なりこもな  
う川畔のうへ一日乾の道も  
刻む佛の名もな  
さふ急も扇よとていふもな

石 習 三  
石 習 三  
石 習 三  
石 習 三

〇  
口

あふ急も扇よとていふもな  
巡月よのほよぬる勢一紐履  
田中の川よ小船川  
舟のまよはれはちをらう人  
神のほよぬるのまよはれ  
心もな旋勢もな  
ほついでな勢一ぬるもな

石 習 三  
石 習 三  
石 習 三  
石 習 三

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

終ふるまでのおもむきもあつて  
もよもよもよとこぼれぬほど  
にうらまへをひきかへす  
こころにきかぬにちがはず  
かたじけなくも  
しるすはつと  
さかたはらふに  
はらふに  
はらふに

〇二

おはなれぬはつと  
花のちぎれもよもよ  
もよもよとこぼれぬほど  
にうらまへをひきかへす  
こころにきかぬにちがはず  
かたじけなくも  
しるすはつと  
さかたはらふに  
はらふに  
はらふに

このころから一時的に大規模な調査

が行われ、

いよいよ勢を失った後、

御廟をめぐり、

御廟の周囲をめぐり、

政士大士の力を借り、

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

御氏に

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

10

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.



